

卷之五

傳

漢書卷之九

是元

當天下之容易形勢也。此亦易於有民  
情之無私矣。況而後之，其力校量  
其形勢，以是而事之者，反居其

の巻今日最盛なりと云ふ事  
なり

十九日

了

一 此の巻は形勢からいへば、  
今更なるべき所あり。然るに、  
おとや

一 此の巻は形勢からいへば、  
今更なるべき所あり。然るに、  
おとや

一 此の巻は形勢からいへば、  
今更なるべき所あり。然るに、  
おとや

廿日 坐元  
一 由金部元へ 主立 常務  
古元へ 進

二 田幸子 月迄 在部 主立 又 下 市  
以 行 部 員 部 員 部 員 部 員

一 由金部元へ 主立 常務  
古元へ 進  
二 田幸子 月迄 在部 主立 又 下 市  
以 行 部 員 部 員 部 員 部 員

三月十二日

一 由金部元へ 主立 常務  
古元へ 進  
二 田幸子 月迄 在部 主立 又 下 市  
以 行 部 員 部 員 部 員 部 員

柳のてふるを海にまかせしもの言ふは  
尾田のてふるを海にまかせしもの言ふは  
聲のてふるを海にまかせしもの言ふは  
所のてふるを海にまかせしもの言ふは  
口をのてふるを海にまかせしもの言ふは  
方々のてふるを海にまかせしもの言ふは  
とあるのてふるを海にまかせしもの言ふは  
春のてふるを海にまかせしもの言ふは  
秋のてふるを海にまかせしもの言ふは  
冬のてふるを海にまかせしもの言ふは  
夏のてふるを海にまかせしもの言ふは

二

半藏及希世法術流傳者之記

一 易山下結者使元の事

玉微院秘記所載の事  
下山路の事  
此山路の事  
之山路の事  
山路の事

三月廿一日

右山路の事

三月廿一日

平子

青島の事  
山東の事  
山東の事  
山東の事  
山東の事



[illegible]

市公

[illegible]







子夜

[illegible]

大分平井中屋主人  
此書乃中屋主人所  
書一之

古古仙史  
集門

袖手看雲  
作客別

唐貞元之末

千美の子常以爲之在左

石通志

素古

卷之六

[illegible]

此後まゝまゝ書中へは書かぬ月あり

古く来りて

一 書中へは書かぬ月あり  
此後まゝまゝ書中へは書かぬ月あり

一 書中へは書かぬ月あり  
此後まゝまゝ書中へは書かぬ月あり

一 書中へは書かぬ月あり  
此後まゝまゝ書中へは書かぬ月あり

古く来りて

書中へは書かぬ月あり

一 書中へは書かぬ月あり  
此後まゝまゝ書中へは書かぬ月あり

[illegible]

宅日

子

[illegible]

も別布山寺へ通る

徳川慶喜の過失 師有教且

宗社永存 師有教且

侯者而別御と通重臣之者之

京中分作と進奉哀訴置似

汝方何卒厚師差合且以成

彼下置以奉預以誠以誠惶頓

首謹言

三月六日 師有

今彼ゆり向 勅使生之殺り

大朝ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

ゆり向ゆり向 勅使生之殺り

天有日月星辰  
地有山川草木  
人有男女老幼  
物有貴賤輕重  
此乃自然之理  
不可不察也  
若夫君子之  
行也  
必先慎乎  
德  
有德此有人  
有人此有土  
有土此有財  
有財此有用  
德者本也財  
者末也外本  
而內末則民  
散而國亡矣  
故君子必先  
慎乎德  
德有六事一  
曰正心二曰  
誠意三曰致  
知四曰格物  
五曰修齊六  
曰治平此六  
者之序不可  
亂也

存  
例  
以  
得  
下  
為  
理  
生  
不  
所  
要  
者  
中  
國  
刊  
本  
東  
亞  
報  
の  
報  
し  
る  
金  
島  
乃  
主  
種  
小  
島  
印  
人  
カ  
女  
言

中夏便江常古題為中夏古

市八日

書

一 孝元天皇御宇

天皇御宇天皇御宇

天皇御宇天皇御宇

天皇御宇天皇御宇

天皇御宇天皇御宇

天皇御宇天皇御宇

天皇御宇天皇御宇

天皇御宇天皇御宇

天皇御宇天皇御宇

天皇御宇天皇御宇

一 崇光天皇御宇

崇光天皇御宇

崇光天皇御宇

崇光天皇御宇

崇光天皇御宇

崇光天皇御宇

崇光天皇御宇

崇光天皇御宇

崇光天皇御宇

崇光天皇御宇

市丸

二平

一 重なること、代はるはる、  
候、つゝ、名を著せし、  
袖、ふらり、あはれ、  
一 芳初、



下

物在平宜與受氣古事

[illegible]

子

市一市文、  
市一市文、  
市一市文、  
市一市文、  
市一市文、  
市一市文、  
市一市文、  
市一市文、  
市一市文、  
市一市文、

古き礼節は世に少く、  
 衣冠先人の風流は、  
 是より更に衰へ、  
 留置平太史、  
 多美の存を以て、

七

冬之六年一月

中葉前小葉後

順

多葉後

砂質皮 七五九

左葉後

砂質皮 七五九

平葉後

右葉後

砂質皮

砂質皮 七五九

右葉後

德助後

砂質皮 七五九

左葉後

砂質皮 七五九

中葉後

右葉後

砂質皮

砂質皮 七五九

右葉後

砂質皮 七五九

左葉後

砂質皮 七五九

一  
古語云水乃上善之類一と云ふ所由  
多かるゝ如く是道下流一 善なりゆへ  
ゆゑ水は善なりゆへ水は善なりゆへ  
と教へて善なりゆへを善なりゆへ  
ゆゑ水は善なりゆへと云ふ所由  
多かるゝ如く是道下流一 善なりゆへ

二月

一  
古語云水乃上善之類一と云ふ所由  
多かるゝ如く是道下流一 善なりゆへ  
ゆゑ水は善なりゆへ水は善なりゆへ  
と教へて善なりゆへを善なりゆへ  
ゆゑ水は善なりゆへと云ふ所由  
多かるゝ如く是道下流一 善なりゆへ

料

3

3

料

上越教育大学附属図書館



F81192412